

～Swing Journal Readers Choice～
スイングジャーナル【リーダーズチョイス】

## Standard Higgins

スタンダード・ヒギンズ

## Eddie Higgins Trio

エディ・ヒギンズ・トリオ

### 1. 貴方と夜と音楽と

You And The Night And The Music（A. Schwartz）(6：14)

### 2. ハウ・マイ・ハート・シングス

How My Heart Sings（E. Zinders）(5：59)

### 3. 懐かしのストックホルム

Dear Old Stockholm（Trad）(5：54)

### 4. サマータイム

Summertime（G. Gershwin）(5：27)

### 5. マイ・ロマンス

My Romance（R. Rodgers）(5：59)

### 6. イフ・ドリームス・カム・トゥルー

If Dreams Come True（E. Sampson）(5：52)

### 7. フェリシダージ

Felicidade（A. C. Jobim）(6：24)

### 8. 恋とは何でしょう

What Is This Thing Called Love?（C. Porter）(5：02)

### 9. 口に言えないすばらしさ

Too Marvelous For Words（R. Whiting）(4：01)

### 10. 不思議の国のアリス

Alice In Wonderland（S. Fain）(5：04)

### 11. ゴールデン・イヤリングス

Golden Earrings（V. Young）(3：28)

### 12. スピーク・ロウ

Speak Low（K. Weill）(5：44)

© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

#### \*

Produced by Tetsuo Hara
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound
Front Cover Photo：© The Estate of Jeanloup Siefert / G.I.P. Tokyo.
Designed by Taz.

スウェーデン民謡として知られていたものだが、1951年に同国をツアー

したスタン・ゲッツがこの曲をレコーディングしたことによって、ジャズの世界でもポピュラーなレパートリーになった。北欧民謡ならではの哀愁に富んだマイナー調のメロディが胸を打つ。ヒギンズの演奏は、その切々とした哀愁を見事に自身のスタイルで表現したもの。

#### 4. サマータイム

デュボースとドロシーのヘイワード夫妻が書いた小説『ボーギーとベス』が、オール黒人キャストによるオペラとしてニューヨークで初演されたのは1935年のこと。これはその中で歌われた有名な子守唄で、作曲を担当したのはジョージ・ガーシュインである（作詞はデュボース・ヘイワード）。このオペラを作曲するに当たって、ガーシュインは黒人の間に伝わる音楽と文化について入念な調査を行ない、その結果、この曲のメロディはニグロ・スピリチュアルスの「時には母のない子のように」からヒントを得て書いたと言われている。テーマ・パートはベースのアルコを用いて重厚に演奏されるが、ソロ・パートに入るとう転して軽やかなヒギンズのブレイが登場する。このブルージーで颯爽としたタッチが魅力的だ。

#### 5. マイ・ロマンス

1936年にブロードウェイで初演されたミュージカル『ピリー・ローズのジャンボ』の主題歌として、ロレンツ・ハート（作詞）とリチャード・ロジャース（作曲）が発表したタイトル通りのロマンチックなナンバー。“わたしの愛の物語には月も、青い珊瑚礁も、星空も、優しいギター伴奏もいらない。あなただけが必要なの”といった内容である。これまたビル・エヴァンスが代表的な演奏を残しているが、軽快に演奏してみせるヒギンズのヴァージョンもそれに負けず劣らずの内容である。

#### 6. イフ・ドリームス・カム・トゥルー

ピアノ・ソロから始まって、やがてリズム・セクションが加わりミディアム・テンポでスインギーな演奏に移行する。ヒギンズのタッチは決して力強いものではない。かと言って軟弱なタッチとも違い、程よい力の抜き

わが国で絶大な人気を誇っているエディ・ヒギンズが、ジャズ専門誌の『スイングジャーナル』の読者投票によってベスト・コンピレーションを作る。こんな夢の企画が同誌で発表されたのは2005年9月号でのこと。この「エディ・ヒギンズ・スイングジャーナル・リーダーズ・チョイス」は大きな反響を巻き起こして、これまでに彼がヴィーナス・レコードで残してきた演奏の中から多くのリクエストが寄せられた。

ぼくの手元にある集計によれば、第1位が2135票を集めた「懐かしのストックホルム」、以下に「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」(1966票)「サマータイム」(1682票)「貴方と夜と音楽と」(1610票)と続く。これらの集計をもとに作られたのが、『スタンダード・ヒギンズ』と『バラード・ヒギンズ』である。

今回の「リーダーズ・チョイス」には14歳から77歳まで、あらゆる年代のジャズ・ファンから応募ハガキが寄せられた。注目すべきは、ヒギンズの人気作（ヴィーナスからリリースされている彼の作品はどれも高い人気を誇っているが）『懐かしのストックホルム』から多くの曲が選ばれていたことだ。表題曲が1位に選出されたのをはじめ、「貴方と夜と音楽と」、「クリフォードの思い出」、「モア・ザン・ユー・ノウ」の4曲が今回のコンピレーションには収められている。

全体の傾向を見ると、「サマータイム」、「貴方と夜と音楽と」、「マイ・ロマンス」など、ジャズ・ファンに馴染みの深いスタンダード・ナンバー、また「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」、「ダニー・ボーイ」、「ビューティフル・ラヴ」などのバラード・ナンバーに人気が集まっている。ヒギンズの妙味は、美しいメロディを繊細なタッチで表現するところだ。それが、これらの曲では最良の形で示されている。

集計結果はヒギンズとヴィーナス・レコードに渡され、両者の協議で上位40曲の中からアルバム用に23曲が選ばれた。さらに発売シーズンを考慮して、クリスマス・ソングの「ベツレヘムの小さな町」が加えられることになった。そして厳選されたこれら24曲が、『スタンダード・ヒギンズ』と『バラード・ヒギンズ』という2枚のアルバムとして発売されることになったのである。

これらの作品からは、類い稀な表現力を身につけたヒギンズのブレイが楽しめる。そればかりでなく、ジャズの歴史に残る数々の名曲にも触れられるところがいい。ヴェテラン・ピアニストのヒギンズが、どうしてこれほど高い人気を獲得したのか。その答えを示しているのがこれら2枚だ。ジャズ・ピアノの楽しさと美しさ、そしてエディ・ヒギンズの魅力。それがここには凝縮されている。

#### 演奏紹介

#### 1. 貴方と夜と音楽と

ガーシュイン兄弟やコール・ポーターよりは知名度が低いものの、作詞家のハワード・ディーツと作曲家のアーサー・シュワルツによるコンビもスタンダードと呼ばれる名曲をいくつも残している。ふたりは1928年から共同で曲を書き始め、1931年には「ダンシング・イン・ザ・ダーク」、1932年には「アローン・トゥゲザー」の大ヒットを飛ばす。それらに続いてヒットしたのが、夜のムードを巧みに演出した1934年発表のこの曲だ。ヒギンズの演奏も夜のムードに相応しく、彼にしてはいつになく麗りを帯びたタッチを披露する。

#### 2. ハウ・マイ・ハート・シングス

ビル・エヴァンスの演奏で知られるこの曲を、エヴァンスのブレイにも通じる繊細なタッチでヒギンズが聴かせてくれる。落ち着いた風情で印象的なメロディを繰る。ロマンチックなムードがいつまでも余韻を引く演奏だ。本家のエヴァンスのブレイも見事だが、こちらの演奏も抜群の出来映えである。ヒギンズの高い人気が納得できるブレイだ。

#### 3. 懐かしのストックホルム

加減が絶妙だ。そこに円熟の味わいが感じられる。ただし、彼の場合は若いころからこういうブレイをしていた。つまり、これこそヒギンズ特有のスタイルということになる。

#### 7. フェリシダージ

ボサノヴァでお馴染みのナンバーをヒギンズはバラード的なアプローチで表現してみせる。リズムはボサノヴァでも、彼の手に掛かれば独特の味わいが醸し出される。このトラックを聴いて思うのは、たとえアップ・テンポで演奏しても、ヒギンズのブレイはバラードに通じているということだ。裏を返せば、それだけ彼はメロディや情感の表現を大切にしているのだろう。この演奏は中盤から力強くなっていくが、それでもバラードを聴いたときのような印象を覚える。

#### 8. 恋とは何でしょう

1929年にブロードウェイで初演されたミュージカル『ウェイク・アップ・アンド・ドリーム』からの1曲。最初はヒットしなかったが、1950年代に入ってソニー・ロリンズをはじめ多くのミュージシャンが取り上げ、それに連れてシンガーも歌うようになった。この演奏で示すヒギンズのアイディアは本当に素晴らしい。コール・ポーターが書いたお馴染みのメロディを、彼が力強いピアノ・トリオ・ジャズに仕上げてみせる。この弾力性に富んだタッチといい泉のように溢れ出るスリリングなフレーズといい、まさにヒギンズの真骨頂が発揮された演奏だ。後半に登場するベース・ソロも勢いに満ちた見事なものである。

#### 9. 口に言えない素晴らしいさ

イントロもなしに突然テーマ・メロディから演奏が始まる。ドラムレスのギター入りトリオということから、ほかのトラックに比べると少々オールド・ファッションな味わいが楽しめる。瀟洒なタッチに真骨頂を發揮するヒギンズだけに、こちらのトリオ編成（ピアノ～ギター～ベース）も彼の資質に合っている。三者によるスインギーなブレイは、小気味のいい味わいと洒落た雰囲気溢れたものだ。

#### 10. 不思議の国のアリス

ディズニーのアニメからは、『白雪姫』の主題歌「いつか王子様が」をはじめ数々のヒット曲が生まれている。その中のひとつとして、これまたスタンダードの仲間入りを果しているのが1950年に封切られた『不思議の国のアリス』の主題歌だ。ルイス・キャロルが残した不朽の名作をアニメ化したこの作品のために、人気ソングライターのポプ・ヒリアード（作詞）とサミー・フェイン（作曲）が書き下ろした美しいメロディが印象的に響く。ヒギンズはブラシ・ワークによるドラムスのサポートをバックに、落ち着いた風情でメロディを歌い上げる。何の迷いもなくストレートにメロディを繰る彼の姿に惚れ惚れとしてしまう。

#### 11. ゴールデン・イヤリングス

ハンガリーのジプシー民謡が原曲で、サラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」にも使われたメロディを用いて、ヴィクター・ヤングが1947年の映画『ゴールデン・イヤリングス』で発表したナンバー。映画の中でマレーネ・ディートリッヒが歌ってヒットした。ジャズではピアニストのレイ・ブライアントがおはこにしているが、ヒギンズはギター入りのトリオでいつになくダイナミックなブレイに終始してみせる。

#### 12. スピーク・ロウ

1943年に上演されたミュージカル『ワン・タッチ・オブ・ヴィーナス』のために、「マック・ザ・ナイフ」などの作曲で知られるクルト・ワイルが作詞家のオグデン・ナッシュと組んで書き下ろした1曲。ちなみにこのミュージカルは1948年に『ヴィーナスの接吻』というタイトルで映画化され、そこでもこの曲は使われていた。個性的なメロディを持つこの曲でも、ヒギンズはギター入りのトリオで彼ならではの演奏に挑んでみせる。

[[c]WINGS 05102332：小川隆夫/TAKAO OGAWA]